

## 幸福について

熊本大学大学院社会文化科学研究科教授 高橋 隆雄

### はじめに

幸福とは何かという問いは、古今東西にわたり問われ続けてきた。それもさまざまな観点から、また、哲学、文学、宗教にかぎらず多くのジャンルで、数えきれないほどの幸福概念が提示されてきた。実際、このテーマに関しては論じるべきことが大変多く、本格的に取り組むとすれば一冊の本に収めることは難しいだろう。幸い、(と、うっかり幸福に関わる言葉を使ってしまったが) 本稿では学術論文のような、先行研究とそれへの評価、新しい視点の提示とその論証といった手間を省くことができる。以下の短い文章の中に、私の語りたいことを自由に述べてみたい。

### 謎謎

次のような謎謎がある。以下の「それ」が指すものを答えてもらいたい。

まず、それは一種類しかないと言うこともできるし、数えきれないほどの種類があるとも言える。

また、短くもあるし長くもある。つまり、それは一瞬のことでもよいし、一定期間持続することもある。永遠に続く場合さえある。

本人の感じ方が重要であるという意味でそれは主観的でもあるが、その中にいながらそれを感じない場合もしばしばある。別のものをそれと取り違えることもあるし、それに関する自分の考えを人からの指摘で否定することもある。すなわち、それは主観の枠に収まりきれない客観的側面も持つ。

さらに、それは個人について言われるとともに、集団や社会についても言われる。

それはごく身近な些細なものでもあり、手の届かない遥か彼方にあるものでもある。そしてそれは、いつでも目の前にあるようであり、すぐ消えてしまいがちのものでもある。また、今感じるものでありながら後でしみじみ思うものでもある。

それはふつう苦や不運と矛盾すると言われる。しかし、よく考えるとそれらと両立しうるし、苦や不運がある方がむしろそれが強く感じられるという場合もある。

また、いつでも誰でもそれを求めていて、それがどのようなことであるか誰でも一応は答えることができるが、ほとんど誰も正解を知らないものでもある。それが証拠に、昔からそれに関する数えきれないほどの本が書かれてきたが、いまだに多くの本が刊行され続けている。

さて「それ」とは何だろうか。

答えは「幸福」である。このように、幸福は極めて多様な仕方で捉えられてきた。

本稿では、そうした多様な幸福概念に対して、ごく大雑把な見取り図を示してみたい。それには出発点が必要であるが、私は日本人なのでまずは日本語の「さいわい（幸い）（サキハヒの転）」、「しあわせ（仕合せ）」などから始めてみたい。出発点は日本語であるが、できるだけ一般化できるように叙述を進めていく。

### 幸福と運

『広辞苑』の頻繁な利用は学術論文ではあまり勧められないが、本稿のような文章では許されるだろう。『広辞苑』には「さいわい（幸い）」（サキハヒの転）の意味として次のようにある。

①運がよく、恵まれた状態にあること。しあわせ。幸福。好運。②（副詞的に）しあわせにも。運よく。

また、それと類似する語「さき（幸）」の意味は、「さいわい」、「繁栄」とある。「幸」を「さち」と読む場合は以下のような意味となる。

「さち（幸）」：（一説に朝鮮語の sal（矢）と同源。矢の靈力をサチといい、さらに矢の獲物、転じて幸福をもいうようになったとする。）①獲物を取る道具。②漁や猟に獲物の多いこと。また、その獲物。③さいわい。幸福。

「しあわせ（仕合せ）」については次のようにある。

①めぐりあわせ。機会。天運。②なりゆき。始末。③（「幸せ」とも書く）幸福。好運。さいわい。また、運が向くこと。

「さいわい」、「さき」、「さち」、「しあわせ」に共通するのは、運がよくて恵まれた状態にあることである。『広辞苑』では「幸福」は、「心が満ち足りていること。また、そのさま。しあわせ」とあるから、幸福ということの原義は、運がよくて恵まれた状態にあることを含意すると言える。（このように幸福と幸運が深く関係することは、英語の happiness などとも共通であるが、詳細は省く。）

すなわち、しあわせ、幸、幸福は、運に大きく依存する。その意味で、幸福とは儚いもの、壊れやすいものと我々日本人は考えてきた。

幸い、しあわせ、幸福と運の結びつきは、『精選版日本国語大辞典』ではさらに強調されている。たとえば、「さいわい・さいはひ」の意味としてまず挙げられるのは、次のような内容である。

神仏など他が与えてくれたと考えられる、自分にとって非常に望ましく、またしあわせに感じられる状態。運のよいこと。吉事にあうこと。幸運であること。また、そのさま。幸福。しあわせ。

このように、日本語の古代から現代にわたる使用法を見るかぎり、日本人にとって、幸福と運は不可分の関係にある。

## 二種類の幸福

幸福と運が深く関わることを念頭に置くとして、次に述べるのは幸福とは具体的にどのような状態なのか、幸福の主要な要素は何かということである。

「幸福」とは「心が満ち足りていること」であるならば、幸福はある種の欲求が満たされていることを条件とすると解せる。すると、幸福とはいかなる状態かを考える上で、人間のもつ欲求についての説が参照されるべきだろう。

マズローは生理的欲求、安全欲求、所属と愛の欲求、承認欲求、自己実現欲求という欲求の5つの階層を挙げている。これにはいろいろ批判もあるが、欲求の概略を知るうえで参考になる。

以上を踏まえて、幸福概念の核にあるものとして、まずは次の二つを挙げることができる。①（自分、家族の）衣食住健康や安全に関する不安のなさ、そして、②他者と一緒にいる、何かをすること（連帯）、そしてその基盤にある他者からの承認がそれである。通常は、これらの核の成立を踏まえて、自己実現などにとともなう幸福が実現する。ところが、それら、特に①は、それが自然の状況に左右されがちなことと、我々が死すべき身をもつ人間であることから、不安定なものとしてある。

ヘッセも『幸福論』で書いているが、幼いころ、まだ人が死すべき存在だと気づいていないときに感じた何ともいえない充足感に勝る幸福はないようである。それは、不安定さを知らない時点での幸福と言える。つまり、「時間」にも「恐怖」にも「希望」にも支配されない喜びの時である。最近手にした五木寛之の『新・幸福論』（ポプラ社 2012 p.61）にもこうある。「知ること、気づくこと、感じること、それはひょっとして幸福の反対側にある世界なのかもしれません。」

しかし人は否応なく不安定さを知ってしまう。時間と恐怖、希望とともに、不安定さが到来することになる。子どものころに感じた限りない充足感はもう戻ってはこない。そこで、不安定な幸福を安定させるように努めることになる。そのための道が大きく分けて二つあると私は考える。すなわち、一方は宗教によって、他方は世俗において安定確保を目指すことである。

日本における「幸福」や「幸せ」の概念が好運と深く関係することは、幸福状態におけるこうした不安定さの根強さを示している。衣食住といった基本的な恵みが

自然の条件に深く依存すること、また健康の持続の難しさを思えば、安定の確保は、人間の力でそう簡単にできるものでないことがわかる。

ヒルティ「二種類の幸福」（『幸福論』第三部、10頁、岩波文庫）にもこうある。

幸福の種類には二たとおりある。一つはつねに不完全なものであって、この世のさまざまな宝をその内容とする。いま一つの幸福は完全なものであって、神のそば近くあることが即ちそれである。

前者は「不安定」で「偶然に恵まれたわずかな人たちだけにしか与えられない」とされる。財産、名声、仕事、芸術、学問、力、健康、高貴な生まれ、愛情といった幸福を求める世俗の道では、幸福は運に大きく左右されるというわけである。

それに対して、ヒルティはこの世に生きる人間にとっての完全な幸福に必要なこととして、「神のそば近くにあること」とともに「仕事」を挙げる。神のそば近くにあることだけでなく、仕事も挙げたのは、友愛や他者との交流なしに本来の幸福はないというアリストテレス以来の伝統に合致している。しかし、ここでの仕事にはそれ以上の意味が込められている。ヒルティは引用文への注において次のように述べている。

だれかが実際に神のそばにありながら有益な仕事を見出しえなかったということの証拠は、とうてい挙げられないであろう。

この「有益な仕事」とは、神のそばにあるならばいつでも見出されるものとされる。そうであれば、たとえ終末期であっても見つけられるものであるから、それは働くことで報酬を得るという通常の意味での仕事ではない。むしろそれは、神のそばにあることと不可分なものではないだろうか。たとえば、仏教では菩薩道のことを「上求菩提下化衆生」とも呼ぶ。自分のために菩提・悟りを求め、同時に衆生を教化済度することが菩薩の道とされる。ここでは二つの行為が表裏一体である。ヒルティもこれと同様のことを述べていると解釈できる。

## 宗教と哲学

宗教による安定確保の典型は、「世界がどうなっても私は救われる」という信念である。ここには、不安定な幸福の地平そのものを棄却する態度がある。世界が不安定であろうとなかろうと私は救われる。世界の在り方と宗教的救いは別次元のことである。そこに宗教的な道の本質がある。世界がどうなっても救われるというのは、宗教を本当に信じ切ることと別のことではない。それは、ゆるぎない信仰からいわば必然的に導かれる信念である。

しかし、神のそばにあることは、日本では必ずしも幸福と結びつかない。古来、日本では神自体が人間から見れば善悪いづれともつかない存在であり、神とともにあっても必ずしも幸福になるとは限らなかった。これは、信じれば絶対に救われるという信仰とは別である。日本では、神とともにあっても、幸福の持続には運が必要である。すなわち、神々が不機嫌にならないことが必要である。そのためにさまざまな仕方では祭祀が行われる。それでも神々の暴威を完全に封じることはできない。

それに対して仏教は、信仰による絶対の救済を約束している点で神道とは異なる。仏教では幸福を求める心自体を迷いの心と捉え、それを捨てることを説く。私が完全に救われるには、救われたいと思っているその私自身を一度捨てなくてはならない。いわば生まれ変わる必要があるというのである。それは、多くの宗教が要求することでもある。ところが、これは現世利益的な方向に心を動かされがちな日本人には、なかなか受け入れがたい。古代から現代にいたるまで、日本人の幸福観は、宗教的救いを信じ切れずにいるため、幸福の不安定さと運頼みという側面を奥深くにもっていると思われる。

世俗の幸福を遠ざける態度は、宗教のみならず、哲学においても見られる。いわゆる理性を働かせることにより得られる幸福である。しかし、ヒルティはこれに痛烈な批判を加える。すなわち、哲学は健全な精神を生み出すのではなく前提しているのであり、老齢や病気が人間の精神を襲って一部を破壊すれば、哲学は十分な力を発揮できなくなる。つまり、哲学は、老齢や病気の時のように、その強さをもっとも必要とする時に、もっとも僅かしか示すことができないのである。たしかに哲学では強靱な思索が求められる。それに依拠する幸福論は、重い病や老齢での心身の衰弱下では機能しないことが予想される。

哲学ではまた、善と幸福を分けて、善を求め幸福を目指さない立場も生じる。しかし、セネカが「幸福について」で、多くの哲学者の言行不一致を述べるように、世俗の幸福を無視することは哲学者にとっても至難の業といえる。みずから莫大な資産を有していたセネカは、そのことを非難されて、財、名誉、健康等の世俗的要素に支配されなければ、それを持つことは構わないと言ったが、苦しい言い訳に聞こえる。

宗教や哲学による幸福への道についてはこのくらいにとどめて、以下では世俗において幸福を求める道について述べてみよう。

### 他者志向的・前進的幸福

世俗のレベルでは、核となる幸福が安定した形で持続して実感されることはほとんどないといえる。健康に生きていることがいつまでも続くことは、欲しても得られない見果てぬ夢である。財産も名声も周囲の状況次第という面を強くもって

る。

世俗での安定確保とは、先に挙げた幸福の二つの核によれば、自分と家族の衣食住・健康・安全の確保のための活動や、他者による承認を求める活動である。ここに幸福の安定のための種々の欲求が現れてくる。これらの欲求は、安定していることの実感として、他と比べて自分がより幸福であることを基準とする傾向がある。それゆえ、しばしば自他の比較をとまなう。いわば「他者志向的性質」をもつ。逆に言えば、種々の欲求の充足率が他と比べて劣っているだけで、幸福は不安定化してくる。幸福の核にあるものが充足されていて不安定ではないような状態でも、周囲との関係によって新しい不安定さが生じてくるのである。このように、これら欲求の充足としての幸福は、それ自体で安定しない性質をもつ。そのため、他者に勝るレベルを得ようとする。

また、我々は不安定さへの不安からさらなる安定化を求め続け、現状維持やレベルの低下を不安定化として嫌悪しがちである。その意味で、世俗での安定確保は「前進的性質」をもつことになる。これはまた、他者志向性と連動する性質であり、安定化を求める活動は、他者志向的と前進的が連動しつつ、どこまでも果てなく続くことになる。

他者志向的かつ前進的欲求にとまなう幸福は、もともと核となる幸福の安定化ということに由来するが、由来を忘却しがちなのは人間の常である。それらは自己目的化していく。核となる原初的幸福は通常は忘れられ、病気や挫折などの転機において再浮上することになる。他者志向的かつ前進的欲求の基盤にある核となる幸福は、病気や挫折というほころびの時点で意識される。不幸や苦を回避するために努力してきたのであるが、その果てに現れる不幸や苦において、かえって幸福の核が自覚されるのである。通常は苦や不運は幸福と相いれないと考えられるが、実際には、苦や不運があるから幸福にめざめたという人も少なくない。

社会のことについて言えば、他者志向的・前進的幸福と科学技術・産業とは相性がよい。そのため、政治や経済を動かす力となるのは、まずは他者志向的で前進的な欲求である。最近はその欲求に直接応えることで選挙を有利に戦おうとする傾向もある。個人レベルでの欲求制御と異なり、これらの欲求は社会全体を巻き込んで、いわば自己運動化している。社会が、幸福の度合いを他の国の幸福度と比較しがちなことや、つねに幸福を更新しようとする姿勢は、個人の場合と似ている。そのため、世俗の幸福を超越するような道学的な幸福観を述べても社会はなかなか変わらない。それでも、社会が病んでいることを多くの人が自覚しているときは、自己運動への疑問が国民レベルで生じてくるかもしれない。

### 主観的側面と客観的側面

話しをもとに戻そう。

幸福の核の一つとして「衣食住や健康、安全への不安のなさ」を挙げた。では、衣食住や安全といった基本的欲求が充足された状態は幸福なのだろうか。上に他者志向的、前進的幸福について述べたように、我々は安定さを求めるあまり、基本的欲求の充足を超えた幸福を求めているように思われる。幸福のもう一つの核である「他者と一緒にいる、何かをする」ことについても同様である。それが実現していることが幸福なのだろうか。他者とともにいることについても、我々は他者とのさらに好ましい関係を求めているのではないだろうか。

このように、我々はそれら二つの核の実現以上のことを目指しがちである。それでも、それらの実現は、幸福であるための必要条件といえるのではないだろうか。このように考える人がいるかもしれない。

幸福の核は確かに幸福であるための重要な要素である。一般に、幸福であるとはそのような要素が備わっていることだろうから、それは幸福の客観的側面を表している。しかし、それだけで幸福といえるわけでもないし、それが満たされていなくても幸福を感じる場合がある。すると、二つの核の実現は、幸福であるための必要条件でも十分条件でもないことになる。

今、幸福を「感じる」と述べたが、この「感じる」ということ、いわゆる主観的側面が幸福であることにとって重要である。しかし、幸福の核に当たるものの実現といった客観的側面が、幸福であることの必要条件でも十分条件でもないのと同様に、幸福を感じるという主観的側面も、幸福であることの必要条件でも十分条件でもない。幸福の核に当たるものが備わっていても幸福でない場合があるし、それらが欠けていても幸福であることがある。同様に、周囲から見れば十分幸福なのに、本人がそう感じていないかもしれない。幸福だと感じていても、どう見ても、誤解や思い込み、異常心理で感じているとしか思えない場合もある。

しかし、本人が幸福を感じているのを否定することは容易ではない。幸福観は人それぞれで異なるというのは一般に真であり、多種多様な仕方で人は幸福を感じる。それでも、幸福であることと幸福を感じることは、痛みと痛みの感覚の結びつきほど強いものではない。痛みの場合、その感覚の原因が特定できなくても、また、手術で切断して存在しないはずの手や足に痛みを感じている場合でさえ、痛みを感じていること自体を否定できない。痛いと言っているその部位に痛みを感じているといえないにしても、とにかく痛みは感じていることができる。

それに対して幸福の場合は、それを感じていると思っていても、本当は別のことを感じているにすぎない等と言うことが不可能ではない。

このように、幸福については、客観的あるいは主観的に条件を十分に規定することは困難である。このことは、各人がそれぞれの幸福観をもつことを可能にしているが、同時に、幸福概念を捉えがたいものにもしている。

### 生きていること自体の肯定

ここで、重い病気などを患った時のことを思い出してみよう。あるいは、想像してみよう。その時、多くの人は健康であることのありがたさを感じるだろう。ふたたびもとの健康状態に戻れないような場合でも、空の雲や庭の花の何気ない光景を見てふと今生きている幸福を感じることもあるだろう。健康が損なわれていて、その意味で、大きな苦や不運がともなっており、基本的欲求が充足されていないとしても、幸福を感じることもある。むしろ、健康で活動している時よりも強く感じることもある。この感覚のうちにあるのは、まずは、基本的欲求の充足のありがたさである。それらはまさに、今は失われている幸福の核として経験される。しかし、それだけではない。その感覚とは、生かされている感覚、あるいは、生きているという本当に大切なものを知った喜びでもあると思われる。ここにはしばしば、それまでの人生の肯定が含まれる。

他者志向的かつ前進的に安定確保に努めることで得る幸福は、いかに充実しているようにも、際限のない活動を要求する。それに対して、ここでの幸福感はみずから獲得したというよりも、他から与えられたという面を強くもっている。『広辞苑』や『精選版日本国語大辞典』では、幸福と運の結びつきが述べられていたが、それはまた幸福が努力によって得られるよりもむしろ与えられることを示している。特に『精選版日本国語大辞典』ではそのことが強調されている。幸福と運や神仏とのつながりは、まず第一には、幸福の不安定さを示しているが、それだけでなく、生が与えられたものであること、つまり生の所与性にも関わっていると言えるだろう。

日常では基本的欲求の充足は当たり前とされていて、他者志向的、前進的に欲求が増大する。そのため、通常、そうした基本的欲求の充足自体では幸福感をもたらさない。しかし、普段は気づかずにいる単に平穩無事であることは、自覚次第で十分に幸福の内容になりうる。さらに、生きていることそのものを喜ぶ感覚、生自体を肯定することは、どのような逆境にあっても、いかなる状況にあっても可能であり、かつ生きることの意味に直接関わっている。また、逆境にあればあるだけ、そのような幸福に近いとも言える。

それは、生きていることだけで幸福と感ずるのだから、幸福の内容としては最小限に見える。ほんの些細なものに思われるかもしれない。しかし、それはその人が生きてきたこと自体を肯定するし、これからの生をも肯定するものである。さらには、運に左右され翻弄される人生そのものを肯定するものである。その意味で、実はもっとも深い意味での幸福であるといえる。

日本の神話に幸福観をさぐってみると、『古事記』には、無事平穩であり衣食住が足りているという意味での幸福表現が見受けられる。それは東の間の幸せといえるが、人生においては大切な時間である。また、天皇は、国土の民が平穩無事に衣

食住の足りた生活を送ることを見て幸福を感じる。イザナミとイザナキの愛のように、『古事記』では男女の愛は幸福の大きな要素となるし、イザナミの国生み、神生みに代表される出産も幸福の要素としてある。

さらに、生の肯定という意味での幸福観が現われている個所もある。スサノヲの命は天上を追放され出雲に至り、そこで村人を困らせる大蛇を退治し、生贄になるはずだったクシナダヒメと結婚する。山を覆うような巨大な大蛇に勝利した充足感は大変なものであり、スサノヲは大きな幸福を感じたことと思われる。しかし、それよりも心惹かれるのは、クシナダヒメを妻として住むべき宮を見つけた時の言葉である。スサノヲは「吾此地に来て、我が御心すがすがし」と言うが、そのときの「すがすがし」に幸福感が表現されている。その感動は、日本最古の和歌とされる「八雲立つ出雲八重垣妻籠みに八重垣作るその八重垣を」という反復表現の多い歌にも表現されている。スサノヲはその時初めて、生まれながらに母（イザナミ）を亡くしたことから始まる悲しみと苦勞の多かった人生を、悲しみや苦勞を含めて肯定したと思われる。喪われた母性を求めるあまり神の道を踏み外し苦難の生を送ったスサノヲにとって、クシナダヒメとの結婚と新居への安住は、そのような人生の全体を意義あるものとする出来事だったといえる。大蛇退治という偉業の達成以上に、そうした平凡な日々は彼に大いなる幸福をもたらしたのである。

## 結び

おそらく古代では、日常の衣食住を満たすことや健康であること、そして男女の結びつきに、現在よりもはるかに強く、生きていること自体の尊さ、ありがたさそして不安定さを感じたことだろう。つかの間であれ、衣食住の安定がただちに幸福感につながる時代は去り、他者志向的で前進的、すなわち不安定さを補完するために、つねに外部からの評価を気にして更新し続ける宿命を負った幸福観に現代は囚われているといえる。

生きていること自体の肯定としての幸福は、宗教が説く絶対の幸福に近いものである。また、哲学者の主張する幸福にも近いかもしれない。それでも、ここでは特定の教義は不要である。哲学的訓練も求められない。それは、健康なときでも病気の時でも、順境でも逆境でも、思索を好む人にもそうでない人でも得られる幸福である。すなわち、いつでも誰にでも接近可能なものである。

そうはいっても、ひとたび病気が癒えると健康のありがたさを忘れるのも人間である。生きていること自体の肯定は、いつでも誰でも可能であるが、持続はたやすくはない。だからこそ宗教や哲学的訓練が必要なかもしれないが、幸福を持続させる必要はないかもしれない。幸福であり続けることをめざすことは、安定化を求め続けることと違わないのではないか。そうした欲求自体をやんわりと括弧に入れてしまうことも、生き方としてありうるだろう。ほんのひと時でも生自体の肯定とい

う境地を自覚したことは、一瞬であっても真の幸福といえるものに出逢ったということである。またいつの日にか、状況次第ではそうした真の幸福に出逢うこともあるだろう。真の幸福は、いかなる逆境にあっても、いやむしろ逆境にあればあるほど近くある。そのことを我々は知っている、あるいはそれを生き生きと想像できる。他者志向的・前進的に欲求充足を追求していても、それはいつでも還ることのできる場合として我々の脚下にある。これで十分ではないだろうか。これ以上求めなくてもよいのではないだろうか。

幸福の持続を求めないことは、運不運に左右されてもそれほど嘆かないことでもある。真の幸福といえるものにあっては、我々の生は与えられたものであると自覚される。また、それは、幸福が運に左右されることも、生の在り方が我々の自由にならないことも語っている。それらはいずれも、生の所与性という点で、我々を超えた存在や世界と我々の生の深いつながりを指し示しているのである。

(2014 年 1 月 29 日脱稿)